

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



「知能検査と発達検査について」

【検査の目的】

学習面や行動面に困り感のある子どもの状態を客観的に把握し、得られた情報を基に支援方法をみんなで考えたり、本人の自己理解を促したりするために実施します。決して子どもに障害のレッテルを貼ったり、選別したりするものではありません。

【IQの数値について】

数値は子どものその日の体調や心理状態で変化するので、絶対的な数値ではありません。数値はあくまでも検査を受けたときのものであり、子どもの一部を知ることしかできません。また、IQは学力と異なり、子どもの努力で伸びたりしません。数値よりも、様々な能力のバランス（凸凹）に注目します。

IQの数値は、年齢を重ねても変化しないように作られています。しかし、発達のアンバランスが認められる子どもは、その限りではありません。あるASD（自閉スペクトラム症）の子どもの追跡調査によると、年齢を重ねることでIQが上がった人は3%、変化しなかった人が30%、下がった人が67%という結果が残っています。

【検査を受ける子どもへ配慮点】

普段と違う活動を病院や学校の別室で行うため、子どもは不安と緊張でいっぱいです。低学年の子どもには、「楽しいクイズに挑戦できるよ」と、高学年以上の子どもには、「あなたに合った学び方を見付けることができる」、「あなたの強みや得意なことが分かる」などと伝え、納得して受けることができる伝え方が大切です。

私は子どもの力を最大限引き出すために、検査前に好きな食べ物や勉強、休日の過ごし方、将来の夢等を尋ねる「楽しいおしゃべりタイム」を設定して緊張を和らげています。また、疲れたときは、いつでも休憩をとれるから安心してほしいと伝えています。

【2つの検査について→WISCIVと新版K式発達検査2020】

1 WISCIV (Wechsler Intelligent Scale for Children)

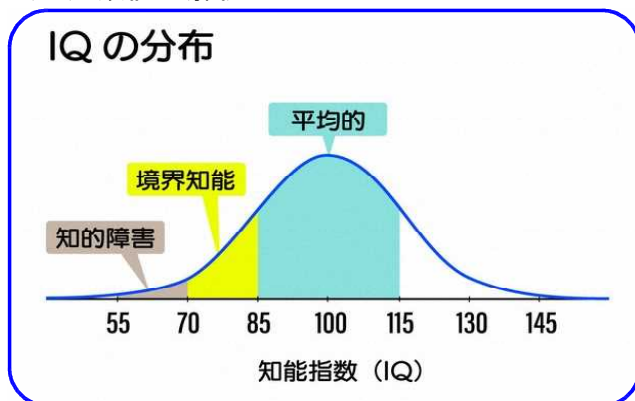
(1) 概要

5歳から16歳の子どもを対象にした個別式知能検査です。

FSIQというIQに相当する数値と、知能の中の4つの指標（言語理解、知覚統合、ワーキングメモリ、処理速度）を算出することができます。

- ①言語理解～言葉を理解・操作する力を測るもの。この能力が高いと言葉での指示が通じやすくなります。低いと図や絵、写真で視覚化するなど、子どもの得意で理解しやすい方法を見付けます。
- ②知覚統合～視覚情報を理解・推論する力を測るものです。この能力が高いと周囲を見てその場に合った行動ができます。低いと分かる言葉で一つ一つ順を追って説明したり、ごっこ遊びやロールプレイにより、対人行動を練習します。なお、新しい「WISC-V」では、知覚統合を「視空間」と「流動性推理」の2つの指標に分けて測るようになりました。
- ③ワーキングメモリ～言語情報を一時的に記憶しながら処理する力を測るものです。この能力が高いと一度覚えたことを苦もなく作業に取り掛かることができます。低いとメモ帳やタブレットに指示されたことを記録するなどの支援が必要です。
- ④処理速度～事務的な作業を迅速かつ正確に処理する力を測るものです。この能力が高いとテキパキとその場に合った作業ができます。低いと板書の量を減らしたり、課題に取り組む時間を十分に取ったりします。

(2) 数値の解釈



- おおよその目安として70未満が知的障害（2.3％）、70以上85未満が境界知能（1.4％）、85～115は正常知能（68％）、更に115～130は高い知能（1.4％）、130以上は特に高い知能（2.3％）と解釈します。
- 知能検査の結果は、同年代と比較してどの位置にあるかを示すもので、頭のよさを表した数値ではありません。その子どもの得意・不得意の比較（個人内差）に注目して、支援に生かします。

2 新版K式発達検査2020 (Kyoto Scale Of Psychological Development : KSPD)

(1) 概要

0歳から成人まで対象となっていますが、小学校低学年ぐらいまでの子どもに実施することが多い発達検査です。乳幼児や児童の発達の状態を調べることができます。

子どもが興味をもって楽しく取り組めるような課題を身近にある玩具等を使い、短時間（20分～40分）で終わられるようにします。

全領域の他に、子どもの発達を「姿勢・運動」（体を使って外の世界と関わる力）、「認知・適応」（自分の目で捉え、手指を使って物を扱う力）、「言語・社会」（言葉や人と関わる力）の3つの領域があります。

(2) 数値の解釈

発達指数（DQ）と発達年齢（DA）で表されます。DQは同年代の平均的な発達を100とした場合の子どもの発達の位置を示す指標で、DAは子どもの発達が何歳相当かを示す指標で月齢で表されます。「認知・適応」、「言語・社会」、「姿勢・運動」のそれぞれの領域ごとの数値と、全領域の数値の両方が算出されます。

『発達指数』の解釈

- ・ 100 : 「平均」
- ・ 80～119 : 「平均領域」
- ・ 80以上 : ノーマル
- ・ 70～80 : ボーダーライン
- ・ 50、55～70 : 軽度知的障害

【保護者へ報告する際の配慮点】

保護者は、新たな気付き、納得、安心、喜び、期待というポジティブな感情と、ショック、混乱、不安というネガティブな感情が生じます。

IQの数値は絶対的なものではないことを前提に、グラフを見せながら数値の意味を説明します。保護者が心を開いてくれるように、最初に子どもの検査の様子や得意なことを紹介してから、苦手なことを伝えます。また、子どものよいところに目を向けてもらえるように、具体的な支援を提案したり、悩みや質問に答えたりします。夫婦であっても、子どもの見方に差があるので、なるべくご両親が同席するようにお願いしています。

検査は、子どもの困り感を保護者と共有し、一緒に支援方法を考える機会にします。子どもには、自分を知り、自分を変えるきっかけにします。



とれたて直送便



乱暴な行動をする子どもへの伝え方

「優しく」などの曖昧な言葉は、イメージを共有するのが難しいため伝わりづらい。お友達が強く叩いてしまった場合、「今の半分の力にしようね。お友達が痛くてびっくりしちゃうよ」などと具体的に話す。乱暴に物を扱う子どもには「音がしないように物を置こうね」と伝えたり、「ドンドンじゃなくてトントンだよ」など、擬音語を使ったりすると分かりやすい。全力疾走した後に半分の力で走ってみる、タンブリンや太鼓をたたく活動を取り入れて、力加減を学ぶことで、優しく、半分等のイメージしにくい言葉の意味を体感する。